

It is I/me who 構文における relative attraction の効果を検証する

—最近の動向—

久屋愛実(立命館大学)

1. はじめに

本研究の目的は、大規模通時コーパスを基盤とする言語変異研究の枠組みで、英語人称代名詞の主格・目的格交替に関わる進行中の文法変化の最近の動向について記述することである。研究対象は、“Who’s there?”への返答としての “It’s I/me.”に見られるような、【It is + 人称代名詞】の構文である。It is に後続する主格補語(subject complement)としての人称代名詞は、規範文法においては主格 I であるべきとされてきたが、記述文法によれば運用面では目的格 me が一般的である。特に「言い切り型構文」(It is I/me. や It is I/me!)については、コーパス言語学や社会言語学の分野から研究が進み(Dekeyser, 1975; Erdmann, 1978; Biber et al., 1999; Nakayama, 2014; Kuya, 2021 等), I から me への格交替はほぼ完了したことがわかっている。ただし、It was I/me [who was wrong]のように、【It is + 人称代名詞】に関係代名詞 who に導かれる節が後続する分裂文(強調構文)の場合、who が関係節内で主格役割を与えられるため、relative attraction (Jespersen, 1894)と呼ばれる文法的制約により、先行詞にあたる人称代名詞も主格 I になりやすいと考えられる。したがってこの「It is I/me who 構文」は、後続要素を伴わない言い切り型構文よりも、me への変化の進行が遅いと予測される(Kuya, 2021)。これを検証するために、本研究では、It is I/me who 構文における me の出現率の通時的変遷を調査し、言い切り型構文のそれと比較する。

2. 先行研究：分裂文と relative attraction

上述の通り It is に後続する主格補語としての人称代名詞は、主格 I であることが規範文法において定められている。しかし、It’s not me I’m anxious about. のような分裂文においては、人称代名詞が関係節内で目的語の役割を担うため、It is に後続する場合でも目的格として生じるのが文体上「自然」である(Huddleston & Pullum, 2002)。また、稀ではあるが、praise him that got thee, (praise) she that gave thee sucke (‘suck’)やthe encouraging words of he that led in the front のように、主節(praise her)や名詞句(the encouraging words of him)の範囲においては目的格であるべき人称代名詞が、that 関係節内で担う役割の影響により主格として生じることもある。このように、先行詞である人称代名詞の格が関係代名詞の格に一致することを relative attraction と呼ぶ(Jespersen, 1894)。ところが、分裂文においては、It is 節と関係節の2つの節で同じ人称代名詞が(表層的に)共有されることから、それぞれの節との関係で主格・目的格交替が起きやすい。結果として、It is 節における人称代名詞の格が、その人称代名詞(先行詞)が関係節内で担う文法機能(主語または目的語)に一致する場合もあれば、一致しない場合もある(表1)。

表1は、分裂文のタイプを、(i) It is 節内における人称代名詞の格が規範文法に則っているか否か、(ii) その人称代名詞が関係節内で担う文法機能、の2つの観点から整理したものである(Quirk et al., 1985)。まず、(a)では、It is 節において規範文法に則った主格 she が使われており、これが関係節内でも came の主語として機能していることから、フォーマル用法としては特に問題は生じない。しかし、(b)においては、It is 節において主格 she が選択されている点は規範的であるが、その人称代名詞が関係節内で criticized の目的語として機能していることから、格の不一致の問題が生じる。そのため、表層的には(c)のように目的格 her を使用の方が好ましいと考えられる(relative attraction の制約がはたらく)が、It is 部分を規範文法の視点から見るとインフォーマル用法となる。(d)と(e)は、It is 節内で規範的ではない目的格 her や me が選択されているが、これら人称代名詞は関係節内で came や is proud の主語として機能していることから、格の不一致が生じる。それでもこれらの構文は、インフォーマル用法としてよく使用される(Curme, 1931; Quirk et al., 1985)。

(d)や(e)の構文が運用面で拡大しているということは、言い切り型構文だけでなく、分裂文においても主格から目的格への変化が進行していることを示唆する。ただし、先行詞(人称代名詞)が関係節において主語の役割を担うことは、主格

から目的格への変化の進行を妨げる文法的制約となる。一方で、先行詞(人称代名詞)が関係節において目的語の役割を担う(c)構文の場合、先行詞の格とそれが関係節内で担う文法機能に不一致がないので、(規範的かという観点を除けば)目的格への変化の進行を妨げない。そこで、本発表では、主格用法が維持されやすい、先行詞である人称代名詞が関係節内で主語の役割を担う構文を対象とする。

表1: 分裂文のタイプ(Quirk et al., 1985, p. 338 をもとに発表者が作成)

分裂文のタイプ	It is 節における人称代名詞の格	人称代名詞が関係節で担う文法機能
a. It was <i>she</i> who came.	主格(規範文法に則る)	came の主語
b. It was [?] <i>she</i> (that) John criticized.	主格(規範文法に則る)	criticized の目的語
c. It was [?] <i>her</i> (that) John criticized.	目的格(informal としてはOK)	criticized の目的語
d. It was <i>her</i> that came.	目的格(informal としてはOK)	came の主語
e. It's not <i>me</i> who's proud.	目的格(informal としてはOK)	is proud の主語

(d)・(e)構文の場合、関係代名詞は who, that の2つである。まず、relative attraction の観点から見ると、who は (whom に対して) 先行詞が関係節内で主格役割を担うことが明示的であるが、that はそれが明示的ではない。したがって先行詞の関係節内における文法機能を明示する who は、それを明示しない that に比べて relative attraction の制約が強いはたらくと言える。Biber et al. (1999) のデータによると、先行詞となる人称代名詞の格は、that やゼロ関係代名詞が後続する場合には目的格として出現することが多いが、who が後続する場合は主格として出現する確率が圧倒的に高い(Erdmann, 1978 や Nakayama, 2014 も参照)。よって目的格用法が拡大する中でも主格用法が最もよく残っているのは who 節を伴う分裂文においてであり、主格から目的格への変化は、言い切り型構文よりも who 節を伴う分裂文において遅く進行しているとの予測が立つ。

次に、この2つの関係代名詞については、文体(style)やレジスター/ジャンルとの関係性が指摘されている。Biber et al. (1999) は、that (やゼロ関係代名詞)の使用がカジュアル・スピーチの典型であるとし、会話においては that 節(やゼロ関係代名詞節)を伴う分裂文の使用が多いのに対して、フィクションや新聞では who 節を伴う分裂文の出現割合が比較的高いことを示した。この点は、who 節を伴う分裂文を収集するコーパスを選定する上で有用な示唆を含む。

さらに、Kuya(2021)は、言い切り型構文において、人称代名詞の種類や It is の It's への短縮の有無が、目的格の選択に影響を及ぼすことをコーパスデータから実証した。通時的に見ると、人称代名詞の中でも I/me で目的格への交替が最も早く完了段階に到達しており、その他の人称代名詞 they/them, we/us, he/him, she/her がそれに続く形で完了に向かって示した。人称代名詞の中で用例数が最も多かったのも I/me である。さらに、It is よりも It's のような短縮形が先行するときに目的格が出やすいことが判明した。これは、前述した、規範文法に反する形式としての目的格の使用がインフォーマルな文体と結びついていること(Quirk et al., 1985; Biber et al., 1999)とも関連性が高いと見られる。

3. 研究方法：大規模通時コーパスの活用

前節の議論を踏まえて、今回の分析対象として、relative attraction の影響が強い who 節を含む分裂文を収集する。収集の対象となる人称代名詞は、言い切り型構文において用例数が最も多く、目的格への変化の進行が最も早かった(Kuya, 2021) ことが指摘される I/me である。It is *I* who を既存形、It is *me* who を革新形として扱い、I から me への変化の進行度を記述する。

研究方法として、コーパスを基盤とする言語変異研究(Corpus-based Variationist Linguistics / CVL) (Szmrecsanyi, 2017) の枠組みを採用する。フィールドワークによる伝統的な変異研究は、比較的小規模なデータに基づき、調査時点における言語使用者の年齢差を実際の時間軸(「見かけ時間」として代用することにより、変化の方向性や速度を予測する。そのため、(1)音韻項目以外では量的分析に耐えうる十分なデータを短期間で得ることが難しい、(2)調査年効果を加味できないため変化予測の精度が必ずしも高くない、といった2つの課題が残る。これらを克服しうる新たな手法が、変異研究にコーパス言語学の手法を取り込んだ、コーパスを基盤とする言語変異研究である。

今回は、言い切り型構文(Kuya, 2021)との比較のために、データ収集に使用するコーパスとして COHA(Corpus of Historical American English) (Davies, 2010)を利用する。COHA は、1820年代から2010年代までの約200年間の実時間データの採取が可能で、約5億語からなる大規模通時コーパスである。Kuya(2021)との比較において留意すべき点は、2021年に行われた当該コーパスの更新により、2010年代のデータが追加された点、1810年代のデータが削除された点、

従来の Fiction, Poplar Magazines, Newspapers (1860年代以降のデータのみ), Non-fiction Books の4ジャンルに加え TV/Movies (1930年代以降のデータのみ) が追加された点等である。ジャンル分布は年によって少々のばらつきがあるが, Fiction が全体のデータ量の 46.8% を占め, Popular Magazines が 22.4%, Newspapers が 9.5%, Non-fiction Books が 12.9%, TV/Movies が 8.4% である。新たに追加された TV/Movies のジャンルは用意された台本があるという点において Fiction と類似性があるとの指摘があり (Davies, 2010), Fiction と TV/Movies を合わせると全体の過半数を占めることとなる。上述の通り, who 節を伴う分裂文の出現はフィクションにおいて多い (Biber et al., 1999) ことが判明しており, 言い切り型構文の用例数が最も多く抽出できたジャンルもフィクションであった (Kuya, 2021) ことから, フィクション類のデータ割合が高い COHA は今回のデータソースとして望ましいと言える。

手順としては, it + be 動詞 + I/me + who に動詞句が後続する用例を集め, 目的格 me の出現率を要因ごとに分析する。分析の対象には, who の直後に動詞が来る (1)~(3) のような例のみでなく, who と動詞の間に副詞(4)や前置詞句(5)等を挟む例も含む。言語外要因としては, COHA でタグ付けされている (i) 出版年, (ii) ジャンル(レジスター)の2つの影響を観察する。言語内要因としては, (iii) it is 部分の短縮性(it' s の有無)の影響を観察する。最後に目的格への変化の進行度について言い切り型構文(Kuya, 2021)との比較を行う。

- (1) “It is I who am the intruder,” I answered, (1856, FIC, Ernest Linwood)
- (2) But after all it was I who had discovered her. (1915, FIC, Police!!!)
- (3) It 's me who 's in danger, not you. (1967, FIC, Play: La Turista)
- (4) And it was me who first spotted the casket. (1952, TV/Movie, Tales of Tomorrow)
- (5) And it was I who, in the inn yard, agreed to pay one pound, (1974, FIC, I Came Highlands)

4. 結果：要因ごとの分布と考察

COHA から収集できた用例は, 既存形 It is I who が 670 例, 革新形 It is me who が 111 例, 合計で 781 例である。革新形の一番古い用例は 1850 年代の it was me who betrayed her at the St. Cecelia (1856, Fic, Justice In By-Ways) である。I と me の合計を 100 とした時の me の出現率(以下, 「me 率」)は全期間(1820~2010 年代)で 15% 程度である。言い切り型構文(Kuya, 2021)では全期間(1810~2000 年代)の me 率が 75% 程度であったことを鑑みると, It is I/me who 構文においては目的格への変化が比較的ゆっくりと進行していることがわかる。構文の出現分布をジャンル別に見ると, 得られた用例のうちのほとんどが Fiction(全用例の 70%以上)や TV/Movies(全用例の 15%程度)からのもので, 構文自体の口語体との関連性が窺える。

年代ごと(10 年区切り)の me 率の変化を見ると, 1970 年代頃から急増期を迎え(35%前後を推移), 2010 年代には 50% に迫り, 最近の動向としては me が多数派になりつつある。20 世紀のデータを利用した先行研究(Erdmann, 1978; Biber et al., 1999)においては, who を含む分裂文では I の出現が優勢であることが指摘されてきたが, そこから me への変化がさらに進化したと見られる。

ジャンル別に me 率を見ると, 最も高いのは TV/Movies(30%程度)で, Fiction と Newspapers では 10%程度, それ以外のジャンルでは 5%程度にとどまる。コーパスの設計上, TV/Movies は 1920 年代以前のデータを含まないため, ジャンルごとに me 率の通時的変化を 50 年区切りの 4 期間(I: 1820s-60s, II: 1870s-1910s, III: 1920s-60s, IV: 1970s-2010s)で見ると, どのジャンルも最近の期間 IV(1970s-2010s)で急激に上昇しており, Fiction では 30%程度, TV/Movies では 50%以上, Magazines で 10%程度である(用例が少ないその他のジャンルは省略する)。

次に It is 部分の短縮形の有無について述べる。It is 節の動詞を見ると it was(449 例)が一番多く, it is(246 例), it' s(79 例), it were(4 例), it be(3 例)である。このうち短縮形 It' s とそれ以外の形式に分けて me 率を比較すると, 前者の方で me の出現が優勢である。ちなみに It' s の用例のほとんどは Fiction(52/79 例)と TV/Movies(26/79 例)からである。さらに, 期間別に見ると, 短縮形なしの構文では最も新しい期間 IV で 25%程度に達したのに対して, 短縮形ありの構文では期間 III で 25%程度, 期間 IV で 80%を超えていた。It is 部分に短縮形の生じる(口語的な)構文の方で me への変化が進んでいることは, 言い切り型構文(Kuya, 2021)でも見られた傾向であった。まだ変化の初期段階にある短縮形なし構文は, 短縮形あり構文と同じ速度で変化が進むとすると, me 率が 80%に達するまでにあと 50 年程度, 完了までには更に時間がかかるものと予測される。

最後に, 主格から目的格への変化の進行度を It is I/me who 構文と言い切り型構文(Kuya, 2021)で比較する。言い切り型構文では 1900 年代に me 率が 50%に達したが, It is I/me who 構文では 2010 年代に me 率が 50%に達しつつあること

から、前者よりも後者において目的格への交替が100年程度遅れて進んでいることがわかる。Who節を含む分裂文では、relative attractionの制約により目的格への交替が遅く進行していることが実証的に示された。

5. おわりに

本研究は、relative attractionの制約にも関わらず、It is I/me who構文でも、主格Iから目的格meへの変化が進行していることを示した。ただし、この構文では革新形meの出現率が全体で15%程度であり、言い切り型構文に比べ、Iからmeへの交替がゆっくりと進行していることが判明した。これは、relative attractionの制約に関する先行研究(Erdmann, 1978; Biber et al., 1999等)の記述の有効性を支持する実証データである。他方、COHAにおける最近の動向に注目すると、2010年代にかけてmeが多数派になりつつあり、「It is I/me who構文においてはIの出現率が圧倒的に高い」との先行研究の記述とは異なる結果が得られた。当該構文の出現するジャンルに偏りが見られた(FictionやTV/Moviesに多い)ことや、It is部分に短縮のある構文(It's)の方でmeへの変化が早く進行していることについては、Kuya(2021)の結果と一致した。さらに、このコーパスから得た実時間データから、変化の完了時期を予測した。

今後の課題としては、I/me以外の人称代名詞への調査の拡大(I/meより遅れて進行しているかどうか)、that節を伴う分裂文との比較、先行詞である人称代名詞が関係節で目的語の役割を担う構文(目的格用法が促進されやすい)との比較等を進める必要がある。大規模通時コーパスの援用により、【It is + 人称代名詞】構文に関連するこうしたデータをさらに幅広く収集することができれば、言語変化を高精度で予測し、実時間データの存在しない過去や未来の言語使用実態の解明がさらに進むことが期待される。

謝辞 本研究はJSPS科研費(23K12179)の助成を受けたものである。

参考文献

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, F. (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Harlow: Longman.
- Curme, G. O. (1931). *Syntax*. Boston: Heath (Reprinted as the Asian ed. by Maruzen, Tokyo, 1959).
- Davies, Mark. (2010). *The Corpus of Historical American English (COHA)*. <https://www.english-corpora.org/coha/>. (2023年12月アクセス)
- Dekeyser, X. (1975). *Number and case relations in 19th century British English: A comparative study of grammar and usage*. Antwerpen: Uitgeverij de Nederlandsche Boekhandel.
- Erdmann, P. (1978). It's I, it's me: A case for syntax. *Studia Anglica Posnaniensia*, **10**, 67–80.
- Huddleston, R., & Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, O. (1894). *Progress in language with special reference to English*. London: Swan Sonnenschein & Co.
- Kuya, A. (2021). A corpus-based variationist approach to the use of *it is I* and *it is me*: A real-time observation of a syntactic change nearing completion in COHA. *Gengo Kenkyu*, **159**, 7–35.
- Nakayama, M. (2014). *It is I* vs. *It is me* in 19th-century English novels. *Studies in Modern English*, **30**, 1–23.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G., & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Szmrecsanyi, B. (2017). Variationist sociolinguistics and corpus-based variationist linguistics: Overlap and cross-pollination potential. *Canadian Journal of Linguistics/Revue canadienne de linguistique*, **62**(4), 685–701.